

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。教会の家族として集まり、主を賛美し礼拝できることは、なんと大きな祝福だろう。それは私たちが歌う賛美歌を通じてだけでなく、今や御言葉の学びを通じてもなされている。

1. *初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。*

B. 礼拝をさらに進める前に、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. 子供たちが教室へ向かう間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第8章の箇所を開いてほしい。

C. 先週、私たちはヨハネによる福音書第8章の一節を取り上げ、イエスが「わたしは『世の光』である」と大胆に宣言した、もう一つの「わたしは〜である」という御言葉を学んだ。

1. この学びを通して、私たちは、イエスがユダヤ人たちが完全に見落としている真理について、絶えず証しされていたことに気づいた。
 - a. イエスは、ご自身が世の光であり、彼らと共にいる神の臨在であり、彼らを導き、導くために遣わされた方であると証しされた。
 - b. また、ファリサイ派とは異なり、ご自身の裁きは真実であり、肉によるものではないと証しされた。
 - c. イエスは、御自身と父が一つであることを証し、御自身を知ることこそが父を知ることであると語った。
 - d. イエスは、もし自分が「偉大なる『フレフレ』」であると信じなければ、人は罪のうちに死に、永遠に失われ、神から切り離されるのだと証しした。
 - e. イエスは、ご自身が語った言葉は父から来たものであり、真実であると証しされた。
 - f. そして、御父を喜ばせることを常に為していると証しされた。御自身のすべての行いは、御父を喜ばせ、敬い、御父の御心を成し遂げることにあったのだ。
2. これまでの学びの中で、宗教的指導者たちの間に高まる緊張と苛立ちが見られた一方で、神殿にいたユダヤ人の中には、イエスを信じ始めている者たちもいたことに触れた。彼らはイエスの言葉や、イエスが証しされたすべてのことを聞き、イエスの語ったことの一部を信じ始めていたのだ。

D. 今日の学びは、そこから再開する。今日は、神殿でその後何が起きたかという文脈の中で、30節を改めて見ていく。

1. テキストはヨハネによる福音書第8章30節から47節までだ。そして、今朝の集いのために私が付けたタイトルは「明らかにされた現実」である。
2. 皆さんも、すでにヨハネによる福音書第8章を開いていることを願う。もしそうなら、神と神の聖なる御言葉を敬うために、できる限り全員に立ち上がっていただきたい。
3. 私の聖書から、この箇所を最初から最後まで読み上げる。私はNKJV版聖書から読む。別の聖書を読んでいる人は、私が読むのに合わせて、自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。

4. ヨハネは、仮庵の祭りが終わった翌日、エルサレムの神殿の敷地内で起こった出来事について、30節で次のように記述を続けている……（R & P）

II. はじめに；

A. この箇所では、イエスは自分の周りに集まった群衆だけでなく、積極的に自分に敵対する宗教指導者たちに対しても語り続けている。

B. イエスは、一連の対比を提示することで彼らに語りかけ、彼らが現在置かれている現実と、本来あるべき姿との違いを明らかにしていく。

1. イエスは、信仰、罪、アブラハム、そして真理といった事柄について語られる。そして、この箇所を読み進めていく中で、これらすべてが、イエスが彼らの前で明らかにしていた現実の中にどのように組み合わさっているかを示せればと願っている。

C. この箇所を学び、ユダヤ人たちが実際にいた場所と、本来あるべき場所との現実を認識する中で、私たち自身の生活に活用できるようになることを願っている。

1. イエスが一世紀当時の人々に求めていたことは、今日、私たちに求めていることと何ら変わらないのだと気づくことだ。

D. 私はこの箇所を四つのセクションに分けて解説することにした。その第一は30～32節で、イエスが「表面的な信仰」と「真の信仰」を対比させている部分だ。30～32節をもう一度見てみよう。

III. ヨハネ8:30-32；表面的な信仰対真の信仰

A. 先週の学びでは30節を読んだが、イエスがここで詳しく説明しているため、私はそれについて深く掘り下げなかった。

1. 30節では、イエスとその証しを聞いていた人々の一部が、イエスを信じ始めたと記されている。
2. これらの人々が救いをもたらす信仰を持っていたと、すぐに結論づけてはならない。ヨハネの福音書では、すでに何度か、ある人々がイエスを信じたと言われている箇所を指摘してきた。
3. ヨハネ2章では、イエスが行ったしるしを見て、その御名を信じた多くの者たちについて語られている。しかし、「イエスは彼らを信頼されなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられ、だれにも人のことを証言してもらう必要がなかったからである。イエスは人の内にあるものを知っておられたからである。」（ヨハネ2:24-25）
4. ヨハネによる福音書第6章では、5,000人を養った奇跡の後、多くの人がイエスを信じることを公言したが、その後、彼らがイエスに従っていたのは、イエスから得られるもの、すなわち無料の食事のためだけだったことが明らかになった。
 - a. そして、イエスが「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲め」と彼らに挑み、ご自身を天からのパン、また罪の赦しのために注がれる血として比喩的に語ったとき、その言葉が彼らにとって不快であったため、多くの者がイエスから離れ、もはやイエスと共に歩まなくなった。（ヨハネ6:66）

- b. ヨハネ6章64節によれば、イエスは最初から、誰が信じない者であり、誰が自分を裏切る者であるかを知っていた。（ヨハネ6:64b）
5. そこで、この箇所では、イエスが語っていたこと、イエスが証ししていたことの一部について、信じ始めようとした人々のことが記されている。
- B. しかし、イエスは31節で、御自身を信じ始めようとしていた人々にこう語りかけ、彼らに問いを投げかけた。「もしあなたがたがわたしの言葉にとどまるなら、あなたがたはまことにわたしの弟子である。」
1. イエスは、人々に自分の言葉の一部だけを信じてもらいたいわけではなかった。イエスは人々に、自分に従うよう呼びかけていたのだ。弟子であるということは、学び手、つまり生徒であるということだ。教えを受けるだけでなく、その教えを実践する者である。
 2. これこそが、イエスが求めていたことだ。イエスは単なる信者ではなく、弟子を求めている。イエスは「大宣教命令」において、弟子たちを遣わし、行って弟子を作れと命じたのであり、単に信者や改宗者を作るためではない。イエスは、人々が自分に関するいくつかの事実を信じるだけでなく、その教えを受け入れ、自分の生活に適用することを求めていたのだ。
- C. ここでの聖句において、イエスは基本的に、これらの人々を単なる知的な同意以上のものへと招いている。それは、イエスの言ったことのいくつかを信じるというだけの問題ではない。真の信仰は、御言葉にとどまることによって示されるのだ。
1. 御言葉にとどまるということは、御言葉に留まり続けることを意味する。イエス・キリストの教えに忠実に歩み続けることだ。どんなことが起ころうとも、私たちはイエスと御言葉に忠実であり続けるということだ。
 2. 御言葉にとどまるということは、キリストとその教えに絶えず従う生き方である。これこそが、イエスが求めておられ、この人々に呼びかけていることなのだ。
 3. そして、主は私たちにも同じことを求めている。イエスは、信仰告白を見てその中にあるすべてのことに同意する人々の群れを求めているのではない。主は、御言葉を信じるだけでなく、その御言葉を実践し、自分の人生に適用する人々を求めているのだ。
 4. ヤコブが言うように、単に「聞く者」にとどまらず、御言葉の「実行者」となることだ。（ヤコブ1:22）
 - a. 自分自身を欺くことはあり得る。単に神の御言葉を聞いたり、それに同意したりするだけで、「自分は大丈夫だ」「うまくやっている」と思い込ませてしまうのだ。
 - b. 神の御言葉を聞き、聞き手であることは重要だが、それは決して神が私たちに求めている唯一のことではない。神は、私たちが御言葉の聞き手であり、実行者であることを望んでいる。つまり、御言葉を読み、学び、そしてそれを適用し、御言葉に従って生きることを望んでいるのだ。
- D. イエスは32節で、もし私たちが御言葉にとどまるなら、真理を知り、その真理が私たちに自由にするだろうと述べている。

1. ここで理解すべきことは、イエスが語っている「真理」とは、学ぶべきものではなく、従うべき存在だということだ。
 2. イエスはこう言われた。「わたしは道であり、真理であり、いのちである。」（ヨハネ14:6）
 3. イエスが、もし私たちが御言葉にとどまるなら真理を知るようになる、とおっしゃる時、その意味は、私たちがイエスご自身を知るようになるということだ。なぜなら、イエスこそが真理だからだ。私たちが御言葉を読み、学び、それに従うにつれて、イエスをますます深く知るようになる。聖書はイエスについて語っているからだ。
 4. イエスは、神の御言葉が肉となった方である。そして、私たちは、父の独り子としての栄光、すなわち恵みと真理に満ちたその栄光を仰ぎ見た。（ヨハネ1:14）
 5. そして、私たちが真理を知り、イエスを知る時、私たちを自由にしてくださるのもイエスご自身である。イエスは私たちを罪の力と罰から解放し、罪の束縛から解き放ってください。
- E. これが、33～38節における次の対比へとつながる。そこでは、イエスが「罪への束縛」と「罪からの解放」を対比させている。私が聖書を読むので、皆さんも自分の聖書を開いて追ってほしい。

IV. ヨハネ8:33-38；罪への束縛 対 罪からの解放

- A. ユダヤ人たちは、イエスが「解放される必要がある」と語った言葉の真意を察した。イエスは、彼らが自由ではないとほめかしていたのだ。それに対し、彼らは「私たちはアブラハムの子孫であり、これまで誰の奴隷にもなったことはない。『あなたがたは自由になる』などと言うのはなぜだ」と反論した。
1. ここで、人々がどれほど盲目になっていたかがわかる。彼らはイエスに反対し、「解放されなければならぬ」という考えを頑なに拒んだため、事実とはかけ離れた主張までしてしまったのだ。
 - a. つまり、ユダヤ人の歴史を考えてみてほしい。彼らはエジプトで二百年ほど奴隷として過ごした。士師の時代には、様々な期間にわたり、あらゆる種類の国や民族に奴隷として支配されていた。モアブ人からカナン人、ミディアン人、そしてアンモン人やペリシテ人に至るまで、これらすべての民族が、ある時期にはイスラエルの民を奴隷として支配し、中には何度も支配した者もいた。
 - b. その後、士師の時代の終わりにはアッシリア帝国が侵攻し、イスラエルの北部の部族を捕囚とした。その次はバビロニア人が南部の部族を70年間捕囚とした。
 - c. つい最近に至るまで、彼らはローマ帝国の支配下に置かれていた。ユダヤ人は何百年の間、奴隷状態に置かれていたにもかかわらず、一世紀のユダヤ人たちは、自分たちは一度も奴隷になったことがないと言い張った。
 2. これは、人々が真理を受け入れる意思がないとき、いかに馬鹿げた行動をとるかを如実に示している。

- a. 真実を受け入れ、真実に直面することを拒むとき、人は真実以外のほばあらゆることを口にし、信じてしまうのだ。
- b. 今日の世界を見渡してみよ。世界は真理に背いている。イエスとその御言葉を拒絶し、真理以外の事実上あらゆることを信じ、主張するだろう。外の世界は狂気そのものだ。
- B. 34～38節で、イエスは彼らの発言に応じ、その質問に答えている。
1. 彼らは「どうして『あなたがたは自由になる』などと言えるのか」と尋ねた。それに対し、イエスは38節でかなり簡潔に「わたしは、父のもとで見たことを語っているのだ」と答えた。
- a. 彼らは、なぜイエスがそのようなことを言えるのか知りがっていたが、イエスの答えは、単に「父と共に見たことを語っている」というものだった。要するに、イエスの言葉は必ずしもイエス自身のものではなく、父から来ているということだ。イエスの言葉は、父とイエス自身が共に見て、目撃したことに一致し、それに沿ったものである。
2. 彼らは自分たちがアブラハムの子孫であると主張した。
- a. イエスは37節で、「あなたがたがアブラハムの子孫であることを、わたしは知っている」と述べた。
- b. イエスはこの事実を否定したり、彼らと議論しようとしたりしなかった。彼らはアブラハムの血筋であり、アブラハムの子孫であり、アブラハムの直系の子孫であったのだ。
- c. しかし、彼らはアブラハムの子孫でありながら、アブラハムのように振る舞わなかった。なぜなら、彼らはイエスを殺そうとしたからだ。
- d. では、なぜ彼らはイエスを殺そうとしたのか。イエスは、彼らの内に御言葉を受け入れる余地がなかったからだと述べている。そして、彼らの心の中にイエスと御言葉のための場所がなかったため、彼らは束縛の中に閉じ込められていたのだ。
- e. イエスはこう言われた。「もしあなたがたがわたしの言葉にとどまるなら、真理を知り、真理があなたがたを自由にする。」しかし、彼らにはイエスと、イエスが宣べ伝えた真理を受け入れる余地がなかったため、彼らは依然として束縛の中に留まっていたのだ。
- C. 彼らが「自分たちは束縛されていない」と主張したことに対し、イエスは大胆にこう宣言した。「まことに、まことに、あなたがたに言う（ギリシャ語では『ヴェリリー、ヴェリリー／真実、真実／アーメン、アーメン』）。罪を犯す者はだれでも、罪の奴隷である。
1. さて、私たちは皆、罪を犯す。私たちに皆、罪深い性質がある。しかし、ここで使われている動詞「犯す」は、現在能動分詞として書かれている。これは、継続的かつ絶え間ない行為を指している。つまり、イエスがここで述べているのは、時折の過ちではなく、罪を犯し続ける習慣的な生活であり、絶えず罪の中に生きている人のことを指しているのだ。
2. もし罪の中に生きているなら、あなたは罪の奴隷だ。私たちはこの真理を身をもって知っているし、理解している。私たち皆、かつては罪の奴隷だったのだ。
- a. ローマ人への手紙6章はこう教えている。「あなたがたは知らないのか。あなたがたが従うために自分を奴隷として差し出す相手、すなわち、あなたがたが従うその者の奴隷となるのだ。それが、死に至る罪であれ、義に至る従順であれ。しかし、神に感謝すべきである。あなたがたはかつて罪の奴隷であったが

- 、心から、あなたがたに伝えられた教えに従ったのだ。そして、罪から解放されて、義の奴隷となったのである。」（ローマ6:16-18）
3. キリストが現れる前、私たちは皆、罪の奴隷であった。しかし、神は福音の良き知らせを通して私たちを救い出し、今や私たちはキリストにおいて自由となった。私たちは罪から解放されたのであり、罪を犯す自由を得たわけではない。私たちは罪の束縛と、死という罪の罰から解放されたのだ。
4. 神の御言葉が私たちの心に深く入り込み、聖霊によって罪を自覚させられ、私たちは罪を悔い改め、イエスを信じた。その結果、私たちはもはや罪の奴隷ではなく、義の奴隷となった。私たちの言うこと、行うこと、考えることすべてにおいて、イエスに仕えることを目指している。
5. しかし、この聖書の箇所に登場するユダヤ人たちは、依然として罪に縛られている。彼らは神の御言葉を耳を傾けておらず、それゆえ、イエス・キリストにあり、またイエス・キリストを通して示される真理によって解放されていないのだ。
- D. そして、彼らは依然として罪の中に生きており、真理に従順になっていないため、イエスは、主の御前彼らの立場が危うい状態にあると述べている。
1. ユダヤ人たちは、アブラハムの子孫であるという身分に頼り、それだけで神を喜ばせられると考えていた。しかし、それだけでは不十分だった。彼らがアブラハムの子孫であるかどうかは問題ではなく、神が求めているのは彼らの信仰だった。彼らは息子ではなく奴隷であったため、家における彼らの立場は安定していなかった。
- a. イエスが、しもべは永遠にその家に留まることはできないと語るとき、まさにそのことを指しているのだ。古代世界におけるしもべには、永続的な地位などなかった。彼らは売られたり、解雇されたり、転属させられたり、追い出されたり、あるいは代わりの者に置き換えられたりし得た。彼らは、自分が属する家に対する相続権など持っていなかったのだ。
- b. イエスが言われているのは、もしあなたが罪の中に留まり、罪の奴隷であり続けるなら、**神の家**、すなわち神の御国において**恒久的な居場所はない**、ということだ。
- C. 奴隷状態は人を罪の中に閉じ込めるが、神の御国において安住の地を保証するものではない。
2. それとは対照的なのが、「息子」という概念だ。息子は永遠に留まる。息子には家の中で恒久的な居場所がある。やがて、相続人として、家全体が彼に引き渡され、彼はその家と家の中の諸事を統治することになる。
- a. そして、息子が何を言おうと、何を望もうと、それは叶うのだ。つまり、鍵となるのは「息子」である。もしあなたが息子と良好な関係にあるなら、あなたは安泰だ。
- b. だからこそ、イエスはこう言われたのだ。「それゆえ、もし御子があなたを自由にするなら、あなたはまことに自由となる。」
- C. 御子は、**あなたがたを奴隷としての束縛から解放し**、家に入ることを許す力を持っている。

3. そして、これが私たちの生活の中で起こったことだ。私たちがキリストを信じるようになったとき、罪の奴隷から、神の子となり、神の御国においてキリストと共に相続人となったのだ。
- a. 使徒パウロは『ガラテヤ人への手紙』の中で、私たちは皆、キリスト・イエスへの信仰によって神の子であると教えている。（**ガラテヤ3:26**）
- b. ガラテヤ人への手紙4章では、私たちが世の要素〔罪〕の下で束縛されていた様子が描かれている。しかし、時が満ちると、神は御子を遣わされた。御子は女から生まれ、律法の下に生まれ、律法の下にある者たちを贖うためであり、私たちが子としての地位を受けられるようにするためである。そして、私たちが子であるゆえに、神は御子の御霊を私たちの心に遣わし、「アバ、父よ！」と叫ばせておられる。それゆえ、あなたはもはや奴隷ではなく、子であり、もし子であるなら、キリストを通して神の相続人である。」（**ガラテヤ4:3-7**）
- c. 私たちがイエスを信じたとき、罪の束縛から解放された奴隷となっただけでなく、御子の家族として息子や娘として迎え入れられ、その家の中で居場所を与えられたのだ。
4. 御子こそが、その家に永住権を持つ方である。そして、私たちが自由にし、御子の家の中で御子と共にいることを許してくださるのも、御子である。
5. これらのユダヤ人たちは、自分たちは自由だと思っているが、実際には罪の束縛に囚われた奴隷である。しかし、イエスは彼らに脱出の道を提示している。束縛から解放され、罪から解き放たれ、神の家族の一員として迎え入れられる道である。

E. そして、ここから次の聖句の箇所に移る。イエスは、「**アブラハムの子孫であることと「アブラハムの子」であることの違い**を対比させながら、神の家族の一員であるというこの考えを取り上げている。39～42節を一緒に見てみよう。

V. ヨハネによる福音書 8章39～42節；アブラハムの子孫 対 アブラハムの子

- A. 「親の背を見て子は育つ」という古いことわざを聞いたことがあるだろう。どんなに親のようにならないよう努力しても、私たちはしばしば親の足跡をたどり、親の後を追う自分に気づく。親が私たちに言ったのと同じようなことを言ったり、したりしてしまうのだ。
1. 子供は往々にして親に似て、親のように振る舞うものだ。両親から受けた手本が、子供たちに影響を与えるのだ。
- B. ユダヤ人たちは、アブラハムを自分たちの父だと主張していた。しかし、イエスは「アブラハムの子孫」であることと「アブラハムの子」であることの違いを明確に区別している。
1. 子は父に似ている。外見も振る舞いも父に似ているが、子孫は単に同じDNAを共有しているに過ぎない。
2. イエスは、彼らがアブラハムの子孫であることを認めたが、彼らが実際にアブラハムの子であるという考えには異議を唱えた。
- C. イエスは彼らの主張に対し、「もしあなたがたがアブラハムの子であるなら、アブラハムの行いをするはずだ」と答えた。

1. では、アブラハムの行いとは何だろうか。何よりもまず、アブラハムは信仰の人であった。彼は「信仰の父」と呼ばれている。ローマ人への手紙第4章で、使徒パウロはアブラハムがどのように信仰によって行動したかを述べている。
- a. パウロは、「彼は割礼のしるし、すなわち、まだ割礼を受けていない間に持っていた**信仰**による義の印を受け、すべての信じる者の父となるためであった……」（**ローマ4:11a**）と記している。
2. ガラテヤ人への手紙の中で、パウロは次のように明確に述べている。「それゆえ、信仰による者だけがアブラハムの子であることを知れ。」（**ガラテヤ3:7**）
3. アブラハムは信仰の人であったため、その子孫**もまた信仰の人**となることが期待されていた。神の御言葉を信じ、その御言葉に信頼を置き、神の御言葉に従って生きる人々である。
4. それがアブラハムの歩みだった。彼は神と、神が彼に与えた御言葉を信頼し、信仰によって神の御言葉に従って生きたのだ。
5. ヤコブは、「『アブラハムは神を信じ、それが彼の義と認められた』という聖書の言葉がどのように成就したかを記している。そして彼は『神の友』と呼ばれたのだ」（**ヤコブ2:23**）と書いている。
6. アブラハムは神の友と見なされていた。彼は神と、神が彼に遣わした使者を歓迎した。それなのに、ここでイエスは、ユダヤ人たちが自分を殺そうとしていることを強調している。彼らは神の友となるどころか、神が彼らに遣わした唯一の御子さえも殺そうとしているのだ。

D. 41節の冒頭で、イエスは彼らが「自分たちの父の行いをしている」と述べ、彼らがアブラハムとは別の父を持っていることをほのめかしている。

1. この言葉は人々の神経を逆なでし、彼らは「私たちは姦淫によって生まれたのではない。私たちはにほただ一人の父、すなわち神がおられる」と応じた。
- a. 彼らはイエスの言葉に腹を立てていたため、イエスに対して侮辱的な返答をしようとしているように見える。おそらく、イエスの家系やその父が誰であるかという疑問に言及し、ヨセフとマリアが夫婦となる前にマリアが身ごもっていたことを踏まえると、イエスは姦淫によって生まれたのではないかとほのめかそうとしたのだろう。
2. しかし、イエスは彼らの侮辱的な言動に一切耳を貸さなかった。そして、もし神が本当に彼らの父であるなら、イエスは神から来て神に遣わされた者であるのだから、彼らはイエスを愛するはずだと、ただそう述べたのである。
- a. **イエスへの愛**こそが、あなたが信仰において息子あるいは娘であるかどうかの真の試金石だ。もしあなたがアブラハムの子であり、神の家族の一員であるなら、神の御子イエス・キリストを愛するはずだ。
- b. ヨハネの手紙第一5章1節にはこう記されている。「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神から生まれた者であり、生み出された方を愛する者は、その方から生まれた者をも愛する。」（**ヨハネの手紙第一5:1**）
- i. 神を愛するならば、その独り子も愛するはずだ。一方を愛して他方を愛さないということとはあり得ない。神を愛すると主張しながら、御子を憎むなら、それは単に自分を欺いているに過ぎない。

- c. 彼らがイエスを愛さなかったという事実は、神が彼らの父ではなかったことの証拠だった。
- d. つまり、彼らがイエスを愛さなかったという事実から、神は彼らの父ではなかったことが証明される。また、彼らの信仰の欠如から、アブラハムも彼らの父ではないことが証明される。では、彼らの父は誰なのか。

E. それが、この聖句の最後でイエスが取り上げている点だ。イエスが「真理に抵抗すること」と「真理を受け入れること」を対比させている、この最後の節を読んでみよう。

VI. ヨハネによる福音書 8:43-47；真理に抵抗することと真理を受け入れること

A. この箇所の最後で、イエスは、なぜユダヤ人たちが自分の言葉を理解できないのか、なぜ自分たちが彼らに語っていることを理解できないのか、なぜ自分たちが彼らに伝えている真理に抵抗するのかについて、核心を突く問いを投げかけている。

- 1. そしてイエスは、彼らがなぜ自分の言葉を理解できないのか、その理由を四つ挙げて答えている。

B. 第一に、彼らはイエスの御言葉に耳を傾けることができないため、イエスを理解できないのだ。

- 1. 彼らには、御言葉に耳を傾ける力、あるいはここで使われている言葉の意味である「従う」力が欠けているのだ。彼らは御言葉に従う力を持っていない。なぜなら、彼らには神の御霊が欠けているからだ。神の御言葉を理解する能力を与えてくれるのは、神の御霊である。
- 2. パウロはコリント人への手紙の中で、まさにこのことについて次のように記している。「肉に属する人は、神の御霊のことは受け入れない。それは、彼にとっては愚かなことだからである。また、それは霊的にしか悟られないことなので、彼はそれを知ることができない。」（**1コリント2:14**）
- 3. 彼らにとって、イエスの言葉は単なる愚かさ過ぎないように思える。なぜなら、彼らの中には、神の御言葉の真理へと彼らを導き、導く神の御霊が宿っていないからだ。
- 4. 彼らを導く神の御霊がなければ、彼らは神の御言葉を理解し、自分の生活に正しく適用することはできない。
- 5. そして、それは私たちにも当てはまる。私たちは、神の御言葉を理解し、自分の生活に適用するために、私たちを導き、導いてくれる神の御霊を必要としている。真理の中で私たちを導き、導いてくれる神の御霊がなければ、私たちもまた、神の御言葉を正しく解釈し、自分の生活に適用する力を欠くことになる。

C. 第二に、彼らは悪魔という父の子であるため、イエスを理解できないのだ。

- 1. イエスは、彼らが御子への信仰を持たなかったため、アブラハムが彼らの父ではないこと、また、御子への愛を持たなかったため、神が彼らの父ではないことを示した。ここでイエスはついに、彼らの本当の父が誰であるかを明らかにするが、それは決して良いことではない。
- 2. イエスは、彼らの父は悪魔であると主張し、それが彼らの生き方によって証明されていると語る。彼らの願いは、その父が行うことをすることにある。そしてイエスは、悪魔が行う二つの具体的な行為を挙げ、それこそが彼ら自身が望んでいることであると強調する。

a. 一つは、彼らがイエスを殺そうとしていることだ。悪魔は初めから殺人者であった。エバを誘惑し、善悪の知識の木の実を取らせたのは悪魔である。エバはそれを食べ、アダムとも分け合い、こうして死が入り込んだのだ。

- i. 死は、悪魔が人類を罪へと誘惑した結果として訪れた。悪魔は、神の像を帯びた者たちの生活に死と破壊をもたらすことを好む。つまり、それはあなたや私のことだ。
- ii. 悪魔は、ほえたける獅子のようにうろつき回り、誰かを食い尽くそうとしている。ペテロは、悪魔のゆえに、私たちが冷静で警戒を怠らないよう勧めている。（**1ペテロ5:8**）
- iii. ヨハネの福音書の後半で、イエスは悪魔を、「盗み、殺し、滅ぼすことだけを目的に来る盗人」と表現する。（**ヨハネ10:10a**）
- iv. 悪魔はあなたの友ではない。彼はあなたの人生にあるすべての良いものを破壊しようとしている。彼に近づかせてはならない。彼から遠ざかっていろ。

b. 悪魔がするもう一つのこと、そして彼らが真似しているのは、真理に立っていないということだ。彼らの中には真理がなく、真理を求める欲求もない。

- i. 悪魔は嘘つきであり、あらゆる嘘の父だ。繰り返すが、これは彼が最初からずっと行ってきたことだ。彼が初めて登場した時、彼は神の言葉、すなわち神の言葉の真理に疑問を投げかけた。
- ii. 彼はエバのもとに来て言った。「神は本当に、『園のすべての木の実を食べてはならない』と言われたのか？」（**創世記3:1b**）
- iii. エバは、園の中央にある善悪の知識の木を除いて、どの木の実でも食べてよいと答えた。エバは悪魔に、それを食べれば死ぬだろうと告げた
- iv. すると、悪魔はどのように応じたか。牙をむき出しにして嘘をつき、「決して死ぬことはない」と豪語したのだ。（**創世記3:4**）
- v. 神は明らかにアダムに語りかけ、こう言われた。「園のあらゆる木の実を自由に食べてよい。しかし、善悪の知識の木の実だけは食べてはならない。それを食べるその日、あなたは必ず死ぬからだ。」（**創世記 2:16-17**）
- vi. それに対し、悪魔は何と言うか。「いや、死なない」と。彼は嘘つきだ。彼の言うことはすべて嘘であり、人々を神とその御言葉に背かせようとする、真実の歪曲に他ならない。

3. 彼らが悪魔と同じことをしたいと願うという事実は、彼らが悪魔の子であることを示している。彼らの心の願いは、彼らが真に誰に従っているかを明らかにしている。

D. 第三に、彼らは真理を望んでいないため、イエスを理解していない。イエスはこう言われた。「わたしが真理を語るから、あなたがたはわたしを信じないのだ。」

- 1. 実のところ、彼らは真理に基づいて行動することを望んでいないのだ。むしろ嘘の中で生きたいと願っている。キリストに従い真理の中で生きるよりも、自分の思い通りに生き、偽りのうちに留まることを選ぶのだ。

2. 彼らは真理よりも嘘を好む。光の中に入るよりは、むしろ闇の中に留まりたいのだ。これは、第3章でイエスがニコデモに語ったことである。イエスはこう言われた。「裁きとは、光がこの世に来たのに、人々が光よりも闇を愛したということだ。彼らの行いが悪かったからである。悪を行う者は皆、光を憎み、光のもとに来ようとしない。自分の行いが暴かれるのを恐れるからだ。しかし、真理を行う者は光のもとに来る。それは、自分の行いが神の御中でなされたものであることが、はっきりと示されるためである。」（ヨハネ3:19-21）
 3. イエスが彼らに真理を語ったため、彼らはそれを快く思わなかった。彼らはそれを受け入れたくなくなったのだ。そして、このような傾向は今日の世界においてますます顕著になっている。
 - a. パウロはテモテへの手紙の中で、次のように記している。「時が来れば、人々は健全な教えに耐えられなくなり、自分の欲望に従って、耳が痒いからと言って、自分たちに都合の良い教師を次々と集めるようになる。そして、真理から耳を背け、空想話へとそれていく。」（**テモテへの手紙第二 4:3-4**）
 - b. 至る所で人々は真理から背を向け、単に自分たちが聞きたいことを言ってくれる人を探している。かゆい耳をくすぐってくれる人を求めているのだ。彼らには真理に対する関心も配慮も全くない。
 - c. 今日の多くの教会で、罪が露骨に容認されていることを、他にどう説明できるだろうか。彼らは、神の御言葉の真理を忠実に教えてくれる人ではなく、単に自分たちが聞きたいことだけを語ってくれる教師たちを、自分たちのために山ほど集めてしまったのだ。
 4. 人々が真理を理解しないのは、単に真理を受け入れたくないからだ。彼らは真理に従って生きたくはなく、神に従うよりも、自分たちが何こそが真実かを決定できる、自分たちで作り上げた世界の中で生きたいと望んでいるのだ。
- E. 4番目、彼らがイエスを理解できない最後の理由は、彼らが神に属していないからだ。
1. イエスは、「神に属する者は、神の御言葉を聞く」と語った。「聞く」という言葉の背後にある意味は、単に耳で聞こえる音のことだけを指しているわけではない。そこには、神の御言葉に従う、あるいはそれに耳を傾けるという意味が含まれている。
 2. 神に属する者は、神とその御言葉に従うのだ。
 3. 愛弟子ヨハネは、後の書簡の中で次のように記している。「私たちが主を知っていることを、これによって知る。すなわち、主の戒めを守ることだ。『私は主を知っている』と言いながら、主の戒めを守らない者は、偽り者であり、その人には真理はない。しかし、主の御言葉を守る者には、まことに神の愛が全うされている。これによって、私たちが御内にいることが分かる。御内に留まっていると言う者は、御方が歩まれたように、自分も歩まなければならない。」（**ヨハネの手紙一 2:3-6**）
 4. 神に属する者は、神の御言葉を聞き、それを実践する。彼らはそれを生き抜くのだ。

5. これらのユダヤ人たちが神の御言葉を受け入れないという事実は、彼らの置かれた状況の現実を明らかにしている。彼らは単に神に属していないのだ。神の真理を受け入れる代わりに、それに抵抗し、それに立ち向かい、最終的には神とその御言葉を完全に拒絶することにつながる。

VII. 結論；

- A. 今日の聖句で、イエスはユダヤ人たちが自分たちはどこにいたいと思込んでいたか、そして実際にどこにいたのかという間の数々の対比を浮き彫りにしている。
1. 彼らは、自分たちの信仰が十分に本物だと考えていた。イエスに関するいくつかの事実を信じれば十分だと考えていたのだ。しかし、そうではなかった。イエスは彼らにもっと多くのものを求めていた。イエスは、御言葉にとどまることによって現れる、イエスに対する真の信仰を彼らに持たせたかったのだ。御言葉を実践することだ。
 2. 彼らは自分たちが自由だと思っていたが、実際には束縛されていた。彼らは罪の奴隷であり、奴隷のままであったために、神の家族の一員としての未来を危うくしていたのだ。
 3. 家族といえば、ユダヤ人たちは自分たちをアブラハムの子孫だと思っていたが、彼らの行動はそうではないことを証明していた。彼らはアブラハムの子孫ではあったかもしれないが、決してアブラハムの子——信仰の子、神を愛し、神の御子を愛する子——ではなかったのだ。
 4. ユダヤ人たちは、自分たちが真理の保持者であり、真理とは何かを決定できると考えていた。しかし、目の前で具現化された真理を受け入れる代わりに、彼らは真理に抵抗し、最終的には真理を拒絶することになる。すなわち、自分たちのメシアを拒絶し、彼を十字架に釘付けにすることになるのだ。
- B. この聖書の箇所が登場する人々は、自らの高慢や、自分たちが霊的だと錯覚していたことに目がくらみ、まさに目の前にある現実を見逃してしまったのだ。
1. そして、これは私たち全員への警告であるべきだと思う。私たちが、真理に抵抗し、真理と戦っているような状態に陥らないようにするため。
 2. しかし、私たちが真理を受け入れ、日々の生活の中で神の御言葉の真理を生き抜くことができるように。人々が私たちの生き方を見て、私たちがイエスの弟子であることを知ることができるように。
 3. アーメン？ アーメン。祈ろう。